

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 6 月 24 日現在

機関番号：12703

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2014～2015

課題番号：26885057

研究課題名(和文) アートマネジメント人材育成におけるポートフォリオを活用した学習評価システムの研究

研究課題名(英文) Introducing portfolio in arts management education: towards a learner-centred assessment

研究代表者

志村 聖子 (Shimura, Seiko)

政策研究大学院大学・政策研究科・研究助手

研究者番号：30736765

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、大学等高等教育機関においてアートマネジメント教育を受ける学生の長期的なキャリア育成および長期的学習のための取り組みの方策として、学習と評価を有機的に関連させるためのポートフォリオに着目し、その活用可能性を論考することにより、アートマネジメント教育における学習評価のあり方に一石を投じるものである。

文献調査と国内外の事例調査を通じて、学生が自らの学習評価の主体として「省察的实践者」であり続けることを促進する手段としてのポートフォリオに特に焦点をあて、その機能を発揮させ活用するために必要な教育上の理念や位置づけ、省察のための指針、学習環境・空間、人的体制、運営のための仕組みを検討した。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to examine the possibility of utilization of the portfolio to enhance students' long-term career development and lifelong learning, and thus to improve the assessment for art management education especially in universities and other higher education institutions. Through literature research as well as national and international case studies, the study focused on the function of the portfolio as a means to enhance students' ability to perform as reflective practitioners, and examined the requirements to realize the optimal use of portfolios such as education principle, outcome setting, learning circumstances, and communication and management system.

研究分野：アートマネジメント

キーワード：アートマネジメント教育 アートマネジメント人材育成 実践型学習 省察 ポートフォリオ 教育観  
構成主義 キャリア

## 1. 研究開始当初の背景

わが国では 1980 年代以降、全国の自治体において公立文化施設（劇場・音楽堂等）が急速に増加し、ハードが整備された一方、施設が十分に活用されないなどソフト面の充実が課題となり、1990 年代以降、施設の運営や企画制作を担うアートマネジメントの必要性が認識されるようになった。それに伴い、アートマネジメントに携わる人材を「育成」することが社会的に要請され、2000 年以降、専門人材の育成を図るため、大学等教育機関においてアートマネジメント講座・学科が開設される例が増加している。

しかしながら、公立文化施設等の「現場」においては即戦力のある経験者が優遇され、アートマネジメントを志す学生が専門教育を受けた後に社会においてキャリアを発展させていくモデルは明確ではない。

現在、「アートマネジメント人材の『活用の充実』」が国レベルでも指摘され、専門人材が「今後のキャリア育成に向けた明確なビジョンを持てるようにすること」の重要性が指摘される中で、教育機関においても、人材の「活用」につなげるための教育上の取り組みを行っていくことが要請されている。

研究代表者はこれまで舞台芸術の運営のあり方を主な研究対象としながら、大学と公立文化施設の連携によるインターンシップの体制づくり等の人材育成に関わる中で、アートマネジメント教育における学生の「学習」と「評価」を有機的に関連させる仕組み作りの必要性について問題意識を有してきた。

すなわち、

- ・ アートマネジメントを志望する学生の卒業後のキャリアパスは多様であるが、長期的に芸術文化（アート）と関わっていけるよう、学生の長期的なキャリア開発に寄与する評価のしくみが必要である。

- ・ 現在、学生に対する評価は、主として学生によるレポートをもとに教員によって行われているが、上記に捕捉しにくい「学生の成長」を適切に把握し課題を発見するためには、従来の評価方法に加えて、学生が主体的に評価を行うしくみが必要である。

- ・ 現在、アートマネジメント教育における「実践系科目」と「座学」は独立したものと扱われ、評価も科目毎に行われているが、カリキュラムを横断した学びの「全体」を評価するしくみが必要である。

本研究は、上記の背景及び問題意識のもと、学生が主体的に「評価」を行い、長期的な学習を可能とするための一つの方策として、評価と学習を一体化させる「ポートフォリオ」に着目し、その活用可能性を論考することを通して、アートマネジメント教育における学習評価のあり方を検討しようとするものである。

## 2. 研究の目的

本研究は、大学等高等教育機関においてアートマネジメント教育を受ける学生の長期的な学習のための取り組みの一つの方策として、アートマネジメント教育における学習と評価を有機的に関連させるためのポートフォリオに着目し、その活用可能性を検討することを目的としたものである。

ポートフォリオとは、「学習、業績、能力を実証するための成果（work）を、一定目的のもとで構造化し、まとめた収集物」と定義され、その制作過程と継続的な内省に多くの意義があるとされる。ポートフォリオは一部の大学等教育機関において導入されているものの、アートマネジメント教育における導入の意義や理論的位置づけについては十分に研究されておらず、今後の更なる活用可能性について検討すべき点が多い。

本研究は、主として欧州の大学院における導入事例を通してポートフォリオの機能を明らかにし、その機能を発揮するために必要な環境やカリキュラムの分析と論考を通してアートマネジメント教育における学習評価のあり方に一石を投じようとするものである。

なお、アートマネジメント人材の育成を担う機関としては、大きく（1）大学等教育機関による場合と（2）公立文化施設等が実務スタッフを対象とする現職研修に分けられるが、本研究は、新人・若手の育成を主眼として（1）大学/大学院におけるアートマネジメント教育に焦点をあてる。

また、本研究は 1 年半（平成 26 年 10 月～平成 28 年 3 月）の期間において実施した。

## 3. 研究の方法

上記の目的を達成するため、本研究期間においては、（1）文献調査を通してのアートマネジメント教育におけるポートフォリオの位置づけに関する検討（平成 26 年度および平成 27 年度）（2）上記の文献調査に基づく欧州の大学院におけるポートフォ

リオ導入事例に関する実地調査（平成 26 年度）（3）学生の省察行動を促進するために必要な学習環境や空間および人的関係に関する検討（アートマネジメント人材育成に関連するプロジェクトにおける参与調査、平成 27 年度）（4）事例調査に基づく、学生による省察行動にあたって必要となる指針のあり方に関する検討（平成 27 年度）を行った。以上を通して、アートマネジメント教育におけるポートフォリオに求められる機能および環境についての方向性を検討、導出した。

なお、当初は初年度に、全国の大学等教育機関においてアートマネジメント関連科目・講座を開設する機関のうち、特に実践型プロジェクトを担当する大学教員・実務家を対象に質問紙調査を行い、学生に対する評価のあり方に関する現状や問題意識等を把握することを計画していた。しかし、文献調査や事例調査を進める中で、アートマネジメント教育における学習者に対する評価のあり方は特定の科目やプロジェクト単位で考えるのみならず、カリキュラム全体を横断する問題としても捉える必要があることが推察され、また、従来型の教員による評価にとどまらず「学習者中心の評価」を取り入れることについては、アートマネジメント教育現場において意識が十分に育っていないことが把握された。さらに、評価（教員による場合と学生による場合を含む）にあたっては、アウトカムの設定や評価基準のあり方が問題となるところ、現状においては多くの科目・プロジェクトでその指針になるものが学生に十分に開示されていないことが予備調査の段階においてシラバスや報告書等から読み取れた。このことから、わが国のアートマネジメント教育における学生に対する評価のあり方に関しては問題意識が十分に育っておらず、方向性も定まっていないことは前提事実として研究を進めることとした。

#### 4. 研究成果

##### （1）アートマネジメント教育におけるポートフォリオの位置づけの検討

まず、平成 26 年度から平成 27 年度にかけての基礎的調査として、高等教育におけるポートフォリオの導入の背景や現状を把握した上で、アートマネジメント教育において求められるポートフォリオのあり方を考えるため、以下の点について検討した。

・日本の高等教育におけるポートフォリオ導入の背景と理念

・ポートフォリオ導入の前提となる「教育観/学習観」について、アートマネジメント教育においてどのように導出し、共通認識を確立するか

・実践型教育（アクティブラーニング）を意味あるものとして成立させるための要件、および省察の重要性

・アートマネジメント教育における省察の対象をどの範囲まで含めるか

特に省察の対象・範囲について述べると、アートマネジメントの領域においては、実践における知識やスキルが暗黙知のレベルで了解されているのが現状であることから、省察の際の指針となるコンピテンシー（専門人材の行動特性や潜在的・顕在的能力）をいかに具体的に設定していくかが重要であることが把握された。かかるコンピテンシーは絶対的な数値で示せるものではなく、アートのジャンルや組織の特性によっても多種多様でありうる。アートマネジメントの領域においては、教育機関（教員）が完成形を提示・提供するのではなく、各学生が自らのキャリアパスを踏まえて参画する形で設定していくことが望ましいことを導出した。

##### （2）欧州の大学院（アートマネジメントコース）におけるポートフォリオ導入事例の実地調査

上記の分析から得られた視点をもとに、平成 27 年度において、アートマネジメント教育におけるポートフォリオ導入の先進事例（ユトレヒト音楽院アートマネジメントコース）を対象に視察を行った。教員へのインタビューや学生が制作したポートフォリオの分析を通じて、実践型学習において学生が省察的学習者であり続けることを促進する手段としてのポートフォリオのあり方を検討した。

対象地のオランダ・ユトレヒト音楽院アートマネジメントコースは、欧州の大学院修士課程としては唯一「実践型講座」を基盤とした研究プログラムを有するコースであるとされるが、カリキュラムの中心科目に「ポートフォリオ・プロジェクト」を組み入れていることが特徴である。

教員への聞き取り及び学生が制作したポートフォリオの分析を行った結果、同コースにおけるポートフォリオの特徴として、

「まずは自分自身を良く知れ」との教育理念のもと、学生の公私にわたる日常の出来事を自らのキャリアに位置づけるための有効かつ重要な手段と位置づけられ、

学生が日常での経験を主体的かつ多角的に掘り下げて省察するための様々の技法を提供するものであり、かかる省察の過程は学生によって可視化される一方、教師は学生の省察を教育的観点から深めるための促進者および指導者としての役割を担い、ポートフォリオの構成上の特徴・工夫については、基本的な共通フォーマットを元に、学生の関心あるジャンルや目標の方向性に応じて分量やデザインをカスタマイズできる構成になっており、学生が主体的に制作に取り組みやすい設計がなされていることを把握した。

ここから、ハードとしてのポートフォリオをどのように設計・構成するかも重要であるが、さらにそれをどのように運営していくかのポリシーや、そのための人的体制やしきみ(ソフト)を作り上げていくことも重要であり、そのための要点を具体例を通して把握することができた。

### (3) 学生の省察を促進するために必要な学習環境・空間および人的関係に関する検討

上記の調査を行う中で、学習者によっては「省察」を行う過程において、自己満足に陥ったり、行き詰る危険があり、このことを想定した教育上の配慮が必要であることが把握された。ポートフォリオ活動を通じてなされる省察が、自己中心的で自己満足なものではなく、学習者の成熟度や経験等に合わせて各自に意味あるものとして行われるためには、学習者が多様な視点や価値観を共有し、自分の所見を相対的に比較検討できる場が必要であると解された。もっとも、調査の対象地であるユトレヒト音楽院アートマネジメントコースの開講時期に合わせて、研究期間中に再度訪問することが困難であったことから、平成27年度は、国内外のアートマネジメント人材育成プロジェクトにおいて参与調査、インタビュー調査を行うこととし、学習者(参加者)同士の学び合いの場を成立させるために必要な要件を探ることとした。主な対象地は以下の通りである。

・アーツマネージャー育成講座(おおさかカンヴァス・中之島のつと)

主催：大阪アーツカウンシル

・東京芸術劇場アーツアカデミー(「文化芸術プロジェクトの効果測定と評価」ワークショップ)

主催：アーツカウンシル東京、東京芸術劇場

・合唱プロジェクト「マタイ受難曲」

主催：ユトレヒト大学合唱団・オーケストラ

以上の事例の考察を通して、学習者同士の学び合いの場を成立させ、「意味のある省察」を促すためには、前提として相互の信頼関係を構築した上で、メンター(ファシリテーター)の役割やパフォーマンスが重要であること、さらにプロジェクトや教育のアウトカムに対する参加者の理解と共有が不可欠であることを導出した。

### (4) 省察のための指針/アウトカムの具体化

日本のアートマネジメント教育機関における教育上の指針は抽象的であり、学生が学内外の活動を行う上での行動指針として機能しているとはいえない。また、学生が自らの学習プロセスや思考過程を省察する際の手がかりにも乏しいのが現状である。その一方で、前述したコンピテンシーを学習の究極目的にすると、大学/大学院が単なる職業訓練学校と化してしまい、その教育的自律性や存在意義を見失う危険がある。そこでコンピテンシーよりも広く上位の概念として、教育上の「アウトカム」を教育機関ごとに設定していく必要があり、これを教育に関わる関係者(学生含む)が共有していくことが重要である。これを学生の側から見ると、学生の省察を促すためには特に学習活動におけるアウトカムが有効に設定され、学生がそれを自らのものとして共有していけることが重要である。

そこで、平成27年度においては、平成26年度に収集したユトレヒト大学院アートマネジメントコースにおけるシラバスを分析し、アウトカム設定の観点から以下の要点を抽出した。

・コースのカリキュラム全体を横断するものとして学習上のアウトカムが明示されていること

・各科目におけるアウトカム、評価方法(定量評価、定性評価それぞれ)、教師の役割、学生の役割等が明示されていること

・全てのカリキュラムを通じた、学生個人における指針が設定されていること(キャリアを広くとらえた上で、人生のビジョンを描く)

### 【結論】

高等教育レベルにおいては、全ての学習環境や条件に適応可能なポートフォリオのモデルがあるわけではなく、特に新しい領

域であるアートマネジメント教育での導入においては、学生や機関の特性等を踏まえてそのあり方を極め細かに検討していく必要がある。ポートフォリオの理念や背景を十分に理解しないまま取り入れても、学生や教員の負担を増やすだけでその本来の意義や潜在的効果は発揮できない可能性があるからである。もっとも、アートマネジメントを学ぶ学生にとって修了後のキャリアを描きにくい現状があることや、アートマネジメントの現場において新人を長期的に育成する余裕がない現状のもとでは、大学等教育機関が新人の育成や社会との橋渡しにおいて多大な役割と責任を担っており、単に従来型の座学や実践の機会を提供し、教員が形式的に評価を行う状況を改善していく余地がある。そのような中でポートフォリオの導入を検討することは、大学等教育機関におけるアートマネジメント教育のあり方や学習評価の主体についての再検討を促すことにもつながり、意義あるものとなるだろう。本研究においては、アートマネジメント教育におけるポートフォリオの可能性とそれを意義あらしめるための環境等を把握したが、今後はその有効性に関する検証を行っていきたいと考えている。

なお、これまでの研究成果の一部を学会にて発表した。今後はこの調査研究により得られた知見を国内外において論文等として発表していくものである。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表](計2件)

志村聖子、日本音楽芸術マネジメント学会「歴史的遺産を活用した舞台芸術のディストリビューションの可能性--オランダの教会における取り組みに着目して--」、昭和音楽大学(神奈川県川崎市)、2015年11月7日

志村聖子、文化経済学会<日本>九州部会・日本アートマネジメント学会九州部会の連携による研究発表会「社会に開かれた音楽実践の場づくりの可能性：オランダにおける合唱プロジェクトの事例を元に」、久留米シティプラザ(福岡県久留米市)、2016年2月20日

[その他](計1件)

志村聖子、シンポジウム<実演芸術で世界とつながる～分野を超えてネットワークを広げ、深めるために>におけるポスターセッション<GRIPSにおける文化政

策研究の最前線--実演芸術編-->「舞台芸術における制作者側と聴衆のコミュニケーションに関する研究：アートマーケティング理論の論点と展開に着目して」、政策研究大学院大学(東京都港区)、2016年1月22日

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

志村 聖子 (SHIMURA, Seiko)

政策研究大学院大学・政策研究科・研究助手

研究者番号：30736765